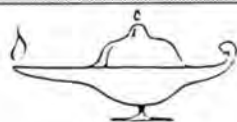


## ともしび



1987. 1

— 大学婦人協会東京支部会報 —

創刊号

- ニュージーランド・オーストラリアの旅
- 生涯教育と私

## 「会報」の発行にあたって

東京支部長 吉 武 勇 子

今年度はじめより懸案となっておりました東京支部の「会報」が、編集係りの方々のご努力によっていよいよ発行されることになり大変嬉しく存じます。これは、昨年度行われました東京支部会員へのアンケートに寄せられたご意見、ご希望によって実現したものです。この「会報」が、支部会員皆様の情報交換の場となりますことを願っております。

東京支部では委員会を中心に年間いくつかの行事を企画いたしますが、それについてのお知らせは一方通行で、皆様のご意見を伺う機会がありません。「支部会報」は、きっと皆様と委員会をつなぐよいパイプ役となることと存じます。

楽しいおつきあいの輪が広がり、東京支部の活動が盛んになりますことを祈りながら、ご挨拶とさせていただきます。



## 東京支部活動状況

大森たへ子

第2水曜日、今日も元気な声が、

ここ戸山マンションの一室、JAUWの事務所に満ちています。たまの例外もありますが、この第2水曜日の午後1時半から約2〜3時間、東京支部の定例委員会が行われます。支部長以下総勢22名（61年度、構成は支部長1、副支部長2、書記2、会計2他）私共支部委員は、興味深く、ユニークでしかも益になるものを求めて、かんかんがくがく、時としてすごい不協和音を奏でながらも楽しく、計画に、実行にと働いております。

例年、新年度スタートから9月まではセミナー研究、それに関連する講演会などが中心になり、夏以後は何故かこのところ設営などの協力も大きく、忙しく過ぎていきます。その後は、バス旅行（財務との共催）、見学、又、講座もの、法律（57、59年度）、日本語教授法（60年度）、美術史（60〜61年度）をシリーズで行い好評を得ております。これらは、委員会で考え、討議されてから、各方面へ調査を行い、又委員会煮詰めてから会場獲得、講師交渉、日時設定、会費の件など細かい事務をそれぞれ

分担して行います。隔月に発行する「支部のおしらせ」に掲載し、皆様の参加を待ち名簿作成をします。当日は、受付、集金、接待、案内、会場係等忙しくあわただしく働きます。このように始終、細々といろいろな仕事をこなすのに、かなりの時間を使います。

本部、他委員会主催の催しものにも出席、お手伝いをします。年3回本部から発行される会報発送も大きな仕事の一つで、支部のセミナー研究報告などもあり、その都度事務所集っては、800通位のを折ったり入れたりします。郵便局へ行くのも一仕事で、送り出した時はホッとします。これらは、私共の仕事のほぼ定ったものの一部です。何かよい企画はないかと常に努力をし、毎年最低一つはユニークなものをと心がけております。忙しくとも、いろいろな方とめぐり会え、啓蒙され、よい委員会ではないかと思えます。会員の関心がもっと高まりより多くの方が参加されるように企画することが使命でしょうか。



## ニュージーランド・オーストラリアの旅

五十嵐 康子

I F U Wの総会に出席する為、私達十六名は八月十七日成田を発ち真夏の日本から真冬のニュージーランドに着きました。どこ迄も続く牧草地に点々と羊の群が草を食んでいて、ニュージーランドに來たのだと云う実感が湧いて來ました。ロトルアへ向う途中、ワイトモ鍾乳洞に寄り、世界中でこの洞窟にしか棲息していない土ボタルを見ました。土ボタルは体に発光体を持つ原生虫で蜘蛛の糸の様な糸を出し虫を捕えて餌にしています。音と光に弱く、真暗な洞窟内をボートに乗って息を殺して天井を見上げると、満天の星を眺める様な美しさと、幽玄の世界に引き込まれる様な五分間でした。ロトルアは、マオリ文化の中心地で彼等の美術工芸を保存する為に研究所が建てられています。舌を出すのがマオリ族の挨拶だそうで、舌を出したお面が沢山並んでいる中に二枚舌のもあって愉快でした。

一旦オーストラリアへ渡り、シドニーのタロンガ動物園で待望のコアラを見ましたが、夜行性の為ユーカー



リの木の上で寝ていてちよつと残念でした。世界三大美港の一つ、シドニー湾をクルーズし乍ら船上で昼食を楽しみ、取れ立ての生牡蠣に舌鼓を打ちました。真青な空をバックにオペラハウスがシドニー湾に浮かぶヨットの様に美しい姿を見せていました。メルボルンでは、ペンギンパ

気を持たせた後、やっと果への行進が始まりました。多勢の観光客が見守る中をヨチヨチと並んで歩く様は、感動的で寒さも忘れて見物しました。凍てついた空に南十字星が瞬いていました。再びニュージーランドに戻り、総会の開かれるクライストチャーチに着きました。町全体がしっとりと落着いた英国調の街並で、中央に聳えるゴシック様式の大聖堂の展望台からは、碁盤目状に造られた美しい市街が一望のもとに見下ろせました。広場にも街角にも、季節の花が飾られ、I F U Wの総会に集まられた世界中からのお客様を歓迎している様でした。この国の人々は温和で優しくいつも笑顔で応対して下さったのが印象的でした。

開会式はマオリ族の歌と踊りで賑やかに始まりました。ゲストスピーカーの基調演説は大変熱のこもったもので、これから始まる会議が実り多いものになるという予感がしました。

この日で会議に出席される方々とお別れして、ツアー組は翌日マウンタクックの観光に出掛けました。目的地が近づくにつれ、窓外は真白に雪を頂く山々が連なり、一段と寒くなりました。途中テカポ湖の辺にひっそりと建つ小さな教会に入りました。祭壇の十字架の後のガラス窓を通して湖や遠くの連山が一幅の絵を見る様でした。遂にマウントクックへの遊覧飛行の時が來ました。氷河に降り立つと、頂上にかかっていた綿雲がスーッと流れて、眼の前にマウントクックの雄姿が浮び上り感激の一瞬でした。足の冷たさも耳のちぎれそうな寒さもすっかり忘れ、全員満足感で一杯でした。私達の十四日間の旅はこれで無事終了しました。



## 秋のバス旅行

豊倉 桂子

十月十五日八時半新宿集合、四十  
三人の参加者を乗せたバスは、一路  
中央高速を紅葉には少し早い甲斐路  
の美術館めぐりへと向う。

快晴のお天気に恵まれて気持ちの  
よいスタートをきったのも束の間、  
ニュースにもなった程の事故渋滞  
に巻き込まれ、予定より一時間余り  
の延着となってしまった。

白樺美術館は、武者小路実篤・志  
賀直哉などの白樺派の方達が計画し  
ながら果たせなかった夢を、銀座の  
或る画廊主が実現したといわれる、  
青春芸術村の中心をなす建物の一つ  
とのこと、桜の古木に囲まれた広い  
敷地に散在する建物とともに谷口吉  
生氏の作品と聞き、オーナーの並々  
ならぬ心入れを感じさせられた。

したがって展示品は、白樺派の方  
達遺愛の品や遺蔵の名画が中心であ  
り小じんまりと暖かな雰囲気漂っ  
ているように思えた。例えていえば、  
お祖父様の書斎でゼザンヌやルオー  
を見、岸田劉生、中川一政、小島善  
太郎などの作者達にもお目にかかれ  
るかも知れないとふと錯覚をおぼえ  
るような、不思議なノスタルジアを

感じる美術館といえはいいだろうか。  
隣接のレストランの、しゃれたフ  
ランス料理の昼食も楽しかった。

時間が充分とってあったので、お  
くれた分をここで調節することが出  
来、二十十分に出発して帰路を山梨  
県立美術館へと急いだ。

ミレーの名画で有名なこの美術館  
は、建物も庭園も立派で、さすが地  
方美術館の代表格としての貫録をも  
っている。

館員の先生に短い時間で要領よく  
ご説明をいただいたあと、各自で常  
設展示を拝見する。

日本とアメリカで好まれるという  
ミレーを中心にしてバルビゾン派の  
絵の並ぶ部屋には深い安らぎがあり、  
近藤浩一路や望月春江など山梨県ゆ  
かりの作家達のところからは、親し  
みと熱気が伝わってくるように思え  
た。

甲斐路国体開催中で花々が咲き競  
う道を、美しい夕映えの富士山に嘆  
声をあげつつ東京へといそいだ。



青春芸術村

## 「美術史講座に参加して」

前田 淑子

杉山先生の講座が二月からあると  
云う事で楽しみにいたして居りまし  
たが、最初の日は生憎の大雪の翌日  
で道路事情も悪かったにも拘らず熱  
心に多数の方が参加されました。先

生の江戸っ子弁の軽妙な自己紹介に  
笑いも出て、和やかに始まったお講  
義も回を重ねるに従って、其の広い  
視野から泉の様に湧き出てくる内容  
の豊かなお話に皆引きつけられまし  
た。時には思わぬ方向に展開を見せ  
る話し振りに、こちらの頭の整理が  
必要でした。「小泉八雲」「森鷗外」  
等の小説から日本人の「帰国の心」  
を説かれたり、又インドに何故仏教  
が発生したかとか、中央アジアの砂  
漠に住んで居る人々には「極楽地獄」  
の話が我々より、もっと実感として  
受取られていたという話や、其の仏  
教がシルクロードを経て、中国から  
朝鮮へ、更に日本へとどの様にして  
伝わって来たかと云う話などが、上  
面だけでなく、良く研究の積まれた  
奥の深さを感じさせられました。五  
回の講義だけでは心残り、もっと  
続けてほしいと云う声に、今度十月  
から又五回シリーズが始まりました。

日本に仏教文化が伝わって来た頃の  
社会背景や、シルクロードを経て北  
から伝わって来た北伝仏教と、南宗  
から伝わって来た南伝仏教とが、二  
派に分れて争われる様子等を、次回  
も引き続きお話し下さるとの事、  
今から楽しみにいたして居ります。

其の他、三月と六月の二回、先生  
の説明を聞きながら国立博物館の見  
学をし、大変有意義でした。又七月  
にはイスラエルに出張なさった時の  
現地の写真をスライドで見せていた  
だき、あまり知られていない異国の  
風物に、もっと沢山見せて頂きたか  
ったと、時間の足りない思いでした。  
これからのいよいよ日本に入ってか  
らの仏教文化の歩みへと話も展開さ  
れてゆく事と思いますが、他の宗教  
より、より多くの日本人の心を捕え  
た宗教がどんなものであったかを学  
んでゆき度いと思います。



## 「杉山二郎先生の経歴」

東京生れ。東大文学部美術史学科  
卒業。奈良国立文化研究所を経て、  
東京博物館に勤務。現在同館東洋考  
古学室長。日本オリエンツ学会理事。

## 生涯教育と私

川村 みどり

現在私は39歳。これまで10年間、生涯教育を職業に結び付けるために夢中であった。その10年を簡単に振り返ってみよう。

大学卒業後約6年、結婚後3年たち、それまで働いたことのなかった私は、手に職をつけるため、なにか勉強を始める決心をした。決心をするまでには様々なことがあったが、主な理由は子供がいないことであつた。周囲に英語が達者な者が多かったということ、なんとなく格好がよい、という実に単純な理由で翻訳の勉強を始めることにした。ちょうど10年前のことである。

翻訳といってもとても文学的素養があるとは思えなかったし、よほどのプロにならないければお金がかせげないと考え、無謀にも科学技術系の翻訳でいこうと考えた。翻訳は労働集約的な仕事で、とてもとても格好がよいという仕事ではないことが後には判明したが、時すでに遅しというところである。

さて、さっそくある大手科学技術系翻訳会社の通信教育を始め、幸運なことに実に懇切丁寧な指導を受け、

その後翻訳の勉強を2年間続けた。私は大学時代スキーとフォークソングに熱中し、とても勉強をしている暇(?)がなかったため、いわゆる劣等大学生であり、大分苦労したが、やはり一番つらかったのは、自分が将来どうなるか道が見えず、孤独な勉強を続けたことである。2年後、その翻訳会社の試験で比較的優秀な成績をあげ、英語の実力としては仕事ができるレベルまでいったが、悲しいことに技術的バックグラウンドがないため実際の仕事をこなすところまでいかなかった。

ちょうどその頃、アメリカ留学の話があり、とにかく英語で食べていくには、英語が書けるだけでは不十分なので、話せるようになり、文化を肌で感じるため、約2年間ボストンの大学に単身留学した。アメリカに行くまでは、本当に挨拶程度しかできなかったため悲慘であつたが、なんとか生れて初めての激しい勉強生活(?)を終え日本に帰ってきたが、周囲には大分迷惑をかけてしまった。この時33歳であつた。

それから職探しで実にみじめな思いをした。年令制限と職歴がないためリクルートセンターでは冷たくあしらわれ、子供にでも英語を教えて

暮したらどうですか。だいたいアメリカ留学で英語ができるようになるなんて考えなら大間違いだ。日本の神田外語で一生懸命勉強している人の方がよっぽどできる(人によるのに!)と相手にしてもらえず、Japan Timesの広告であるコンピュータの専門商社で翻訳と通訳(ずうずうしいですね)の仕事を見付けるまでに半年かかった。

それから5年、会社では仕事がおもしろく、充実した毎日であつた。しかし自分より特別優秀でない男性が優遇されているのがおもしろくない、今年1月に退社し、独立して翻訳会社を設立した。(今から思うところという考え方は傲慢で、今でもこれから男性諸氏とは時々会ってアドバイスをしてもらっています。)幸い、昔翻訳の通信教育を受けた会社の助力により、私の会社もなんとか目がついてきた昨今である。勤めていた時とはまったく別の苦勞で、一時は精神的理由により体調をくずしたが、現在は順調である。

さて、通信教育を始めた時は28歳であつたが、あれからはや10年たった。この間私を動かしてきたのは何か、と最近よく考えるが、もちろんなんとか苦勞をかけた家族に自慢し

てもらえる仕事をしたい、というのもその動機の一つであるが、一つの段階から次の段階に移っていかざるを得なかったのは、自分の人並みはずれた気の弱さか、と思っている。ある段階に留ると自分が悩み、行きづまるのが目に見えている時、その怖さで次の段階がある意味ではもっと大変なのもかまわずに進んできたような気がしてならない。今後会社が安定するまでは大変であるが、もう少し安定したら、年齢、職歴に係なく優秀な女性にたくさん働いてもらえるような会社にするのが夢である。

## 桜楓会カウニングセラリング研修会のお知らせ

昭和61年度 春期研修カリキュラム

◇月曜コース(4月13日・17月6日)

「基礎学習」9時半～12時半

◇水曜コース(4月15日・17月8日)

「グループ学習」9時半～12時半

◇木曜コース(4月16日・17月2日)

「カウニングセラリング実習」9時半～12時半

◇土曜コース(4月11日・17月11日)

「グループ経験」9時半～12時半

「基礎学習」他 1時半～4時半

くわしくは60円切手同封の上左記へどうぞ

〒112文京区目白2-8-1日本女子大学内

(出)桜楓会校風学園03・(943)・0052

## セミナー研究報告

吉武 勇子

東京支部ではセミナーの研究課題として大学問題を取り上げることが早くから決まっていたが、その中でも何にポイントを置くかを決めるのに迷った。その結果、一般に取り上げられているのは異なった観点から学生の意識を探ろうということになった。しかし、学生対象のアンケートを行うには、余りにも時間が足りないため、対象を昭和58年以後大学を卒業した若い方達として、支部委員一人あたり最低十名を目標にアンケートを依頼した。委員以外の会員の協力も得て、三二八名にアンケートを送り、二〇二名から回答をいただいた。

アンケートの設問を作成する段階と回答の集計に当って、支部委員のご苦労は並々ならぬものであった。誌面の都合上、集計結果のすべてをここに報告できないが、詳細は四月発行予定の「セミナー報告書」をごらんいただきたい。ここでは、集計結果から考察を試みたことについて報告したい。

アンケートでは大体①現在の職業

と大学教育との関連、②大学生生活の過ごし方、③大学教育の意義、④大学に改革を希望する点、の四点について質問した。

大学で学んだことを今の仕事に生かしていないという回答が男女共に多いが、役立っている点としては、文系は一般的な基礎知識を挙げ、理系その他は専門の学問や技能を挙げている。大学進学の原因と、大学生生活の過ごし方について尋ねたのに対して、「青春を楽しむ」、「学生生活をエンジョイする」が上位に入っていることは、予想どおりであったが、一方で「教養を身に付ける」も進学理由の一位、大学生生活の過ごし方の二位に入っていることは「大学が学問と人間形成の場である」という従来の大学の理念が、未だ通用するということを物語っているように思われる。また、遊んでばかりいるように見られる現代の若者が、「遊びながらも、将来のために目標をもって、何か打ち込めるものを見付けよ」と後輩にむけてアドヴァイスしていることも印象的であった。

この上は、大学当局が学生におもねることなく、大学の質の維持に努力してほしいと願うところである。

## セミナーを終えて

峯川 正子

例年東京支部はセミナーの研究発表と共に設営の部門、即ち会場・受付・懇親会など言わば裏方を受け持つて居ります。

研究発表について云えば、一般会員の方にその都度参加を呼びかけますがなかなか協力を申し出て下さる方も無く、止むを得ず委員達が与えられたテーマに沿って企画・資料集め・集計整理・討議・論文作成をすることになります。テーマが委員達の関心のあるものであり、充分検討された企画が意欲をかき立てるものであれば和気藹々楽しい勉強会となり良い報告も出せるのですがテーマも気が乗らない、話し合いもうまくいかない、期間も足りないとなるとその結果は惨めなことになってしまいます。

設営についても結局は委員に頼ることになり、しかも全員が出席可能という訳にはいきませんので当日はゆつくり会場に座ってセミナーに参加することもままなりません。当日までの準備も何かと気骨の折れることとです。

会場にしても東京の京王プラザホテル・埼玉県にある国立婦人教育会館・神奈川県立婦人総合センターと年によって違い、夫々一長一短といえましょう。今回の婦人総合センターについていえば、交通の便、ホールの設備の良さという利点はあるものの、すべての準備片付けは借りている時間内でのセルフサービス。重い机や椅子の移動・荷物の運搬・会場の提示・昼食やコーヒープレイクの世話など平均年齢五十歳の委員達にとってはなかなかしんどいこととございました。些か愚痴めいてまいりましたが勿論有能な支部の委員達のこと故、時間が足りなかつたが人手が少なかつたが何とか収支を補って大した破綻もなく会を終らせましたが、これも参加なさった方々に満足して帰って頂きたいと云う誠意の現れ、それでも願わくば一般会員の方々の積極的参加を得て来年度のセミナーは楽しくそしてゆとりのあるものになりますよう切に望む次第でございます。



## 他支部活動紹介

## 京都支部

京都支部は、今年度は名古屋の全国総会への参加、支部総会、ニュージランドの世界大会への三名の出席、神奈川のセミナーへの参加などをおこなっています。年金問題の講演会やバザーも開催しました。

京都という土地柄からIFUWの外国のお客様をお迎えする機会に恵まれています。国際化との関連で、支部内に日本語教育研究分科会が一九八四年に発足し、その第一シリーズについて第二シリーズ「日本語教育研究」が発刊され、一部の全国の会員の方々にはすでにこらんだできました。

来年の三月三十一日と四月一日のJAUWの全国総会は、京都でおこなわれます。京都では、そろそろ柳が芽ふき、桜だよりがきかれるシーズンです。四月二日の観光にもぜひ御参加くださいませ。京都支部会員一同が心からお待ちしております。

(永島美耶)

## 札幌支部

英語輪読会は十一年続いている。

最初は土橋会員の指導で、ビゲローの「アメリカの形成」などを読んだが三年目から北大の高久教授を迎えてシェイクスピアのクラスとなった。「ベニス商人」に始まり今年九冊目は「ジュリアスシーザー」。出席者はいつも三十数名で週一度市民会館に集まる。シェイクスピアの魅力にひかれてか出席率はよい。昨年「ハムレット」の途中で二人のクラスメイト(84歳、74歳)を病で失ったことは大変残念であった。(企画委員会)

仮名書道講座は、書道家白居会員の指導で月に二回、市民会館で開かれている。今年で六年目を迎え、約二十名程のメンバーが参加。平安書道の仮名と漢字の調和と基礎として学び、その上で古筆の稽古をしながら自由作も織り込み、創作面での勉強もしている。

書道より二年あとに始まった古典の方は、輪読の形で月に一度の学習会を持っている。平安時代の女流文学を、というところで「更級日記」を終えて現在は「枕草子」を読んでいる。(財務委員会)

## 東京支部サークル活動

## 俳句会

俳句会は昭和四十三年秋、伊豆山美津枝姉が東京支部長の時、会員の東早苗姉(七彩主宰)を師とし始められました。その後東先生が御病氣のため、五十一年には馬酔木同人の村上光子先生を迎えて現在に至って居ります。現在会員は十二名、第一水曜日の十二時半より四時迄事務所にて、席題二句、雑詠三句をもつて楽しい勉強の一刻を過して居ります。非才の弟子共を懇切丁寧に、又それぞれの個性を伸ばすよう御指導下さる村上先生のお人柄に接し、この十年間一人も退める者もなく、近頃、漸く俳句について少しずつ目が開かれ始め、今後の人生の生甲斐の一つとしたいと互に励まし合い、時には慰め合い、楽しみつつ苦しみつつ俳句と向き合っています。合同句集「早蕨」も昨夏第三集を出しました。吟行も時折行い、古くは木曾、高遠に遊び、時には一泊吟行もし、一夜苦吟して居ります。このように大変楽しい会なので同好の方は御参加下さいませ。

(佐藤千鶴子)

## 読書会

昭和四十三年発足し、当時は月例会の場所を確保することに苦労したが、今の事務所が設けられてからは毎月第二火曜日一時半から二時間の会合を二十年近く続けて来た。

会員の興味、希望により歎異抄、花伝書、トインビー世界史、源氏物語、とはずがたり、古事記とギリシヤローマ神話の比較等々。又各自が読んだ本を紹介するなど、学識豊富な会員を頼りにし、談論風発、新説珍説続出、二時間は物足りなく終わってしまう。

今年度の終わりに枕草子を読み、来年度は現在の世界状況を考え、放送大学テキスト中村元著、比較思想論を取り上げることとした。十一月例会は上智大のグロウタス神父にこれに関連する講義をお願いした。

最近、会員も少なくなりましたが、親密度は深く、お茶を入れ心おきなく池波正太郎から清少納言まで歴史と人の心にふれ、世界を知りたく集まっている。

(岩野 鈴)



## 会報発行に際して

— 本部より —

丸山庸子

この度は、会報の御発行、おめでとうございます。

この御計画をうかがったとき、先ずこれはいいと思いました。東京支部の方々は、毎年のセミナーはもとより本部の全ての行事に御協力いただいております、いつもそのすばらしい機動力や細かい気配りに感謝し、敬服していたのですが、会報は、この豊富な人材の格好な紹介の場になると、先ず思えたからです。持前の豊かな発想で、楽しい紙面づくりをなさると予想していますが、これが東京支部のもう一つの顔となり、支部活動が更に広がり、より多くの方々に御参加いただける、よい機縁ともなりますよう期待しています。

さて、本部の各委員会について説明するようにとの御依頼を受けましたが、紙面の都合上、次に表にして簡略に記しておきます。

本協会には以下の常設委員会を置き、会長の任命による理事が委員長に任じられます。常設委員会の委員は、委員長が理事会の承認を得て定

めます。任期は委員長の任期に準じます。

## 一、財務委員会

本会の財務を司り、且つ予算を作成して総会に提出します

## 二、国内奨学委員会

国内の奨学金（ホームズ奨学金を含む）に関する事項を扱います。

## 三、国外奨学委員会

外国に於ける研究の為に提供される奨学金及び、外国人研究者に提供する奨学金に関する事項を扱います

## 四、国際第一委員会

IFUWならびにその加盟協会との連絡を担当します。

## 五、国際第二委員会

国内に於ける国際関係事項を扱い、国連NGO国内婦人委員会、及び五十一婦人団体（主として七婦人団体）との連絡を担当します。

## 六、教育委員会

教育問題に関する調査研究を行い、その向上を計ります。

## 七、婦人の地位委員会

婦人の地位に関する調査研究を行い、その向上を計ります。

## 八、社会福祉委員会

社会福祉に関する調査研究を行い、その啓蒙と増進を計ります。また、社会福祉奨学金に関する事項を取扱います。

## 九、会員委員会

会員の増加を計り、会員名簿を管理掌握します。

## 十、報道委員会

会報を編集し、会の目的並びに活動の宣伝普及につとめます

以上の他に、委員会は理事会の必要と認めた事項を取扱います。以前、企画委員会は常設でしたが目下のところ全国セミナー開催時に特設され、副会長を委員長としてセミナーの運営を担当しています。

## 投稿のおねがい

「私の生き方」「仕事と私」「私の子育て」など、体験にもとづいた原稿をお待ちしています。

四千字詰原稿用紙四枚以内  
〆切は四月末日

支部事務所宛お送り下さい。  
尚、会員相互の交流及び支部会報についての御意見があらましたらお寄せ下さい。

## — 読後感 —



井上 咲子

小谷瑞穂子著「十字架のユダヤ人」誤解されし民族と日本人」を興味深く読みました。

アウシュビッツ、イスラエル、中東問題、核兵器、果ては日本人は東洋のユダヤ人であるとの日本の経済成長に対する欧米の批判等を考える時、私達はその何れもの根底にあるユダヤ人問題をしっかりと認識する必要があります。私達の素朴な疑問「イエスもその母も使徒たちも、イエスが救おうとした人々も皆ユダヤ人なのに」に凡ゆる面から納得がいくように答えられていると思います。キリスト殺しの名の下に、キリスト教会の「身代り山羊」に仕立てあげられました。そしてキリスト教徒とユダヤ教徒の闘いととも「欧米社会の歴史と思想は流れてきた」といっても、決していいすぎではない。」又、本書の中の「新釈・ウェニスの商人」の一節「シェイクスピアは観客の良識をゆきぶっているのである。だが観客の反応は——中略——後世アンチ・ユダヤ作品の代表作のようにとられしてしまった。」

## 東京支部新入会員

| 氏名    | 出身校 | 住所 | 氏名    | 出身校 | 住所 |
|-------|-----|----|-------|-----|----|
| 山崎子   | 聖心  |    | 三宅佳子  | 阪大院 |    |
| 三輪明美  | 早大  |    | 森田富美子 | 津田院 |    |
| 宮本美智子 | 立教  |    | 石井美代子 | 津田院 |    |
| 水野真知子 | 立教  |    | 飯沼健子  | 津田院 |    |
| 赤木洋子  | 立教  |    | 島山千香子 | 早大  |    |
| 大塚信子  | 立教  |    | 本田桂子  | 早大  |    |
| 関野世り  | 立教  |    | 佐藤千登勢 | 一実  |    |
| 中野マヤ  | 立教  |    | 清水富子  | 慶應  |    |
| 奥田洋子  | 立教  |    | 東福都美子 | 慶應  |    |
| 長畦すめ  | 立教  |    | 大坂裕子  | 慶應  |    |
| 松浦千悦  | 立教  |    | 内藤美登里 | 慶應  |    |
| 斉藤純子  | 立教  |    | 青山みゆき | 慶應  |    |
| 小嶋節子  | 立教  |    | 馬場真由美 | 慶應  |    |
| 新林久子  | 立教  |    | 鈴木紀枝  | 慶應  |    |
| 深沼昭子  | 立教  |    | 大上ミツ子 | 慶應  |    |
| 佐々木洋子 | 立教  |    | 松崎哉子  | 慶應  |    |
| 鈴木美枝子 | 立教  |    |       |     |    |
| 橋本美枝子 | 立教  |    |       |     |    |
| 祐子    | 立教  |    |       |     |    |

物故会員

笹平正子、田辺繁子

(昭和61年10月現在)

「中国留学生友の会」  
へのお誘い

JAUW東京支部で三年ほど前に、中国語講座が開かれ、その最終回に中国からの留学生を招いて、浜離宮から隅田川を舟でくだり、浅草見物をしたことを覚えていらつしやいますか？

そのお膳立てをしてくださいました会員の小川嘉子氏(元中国大使夫人)が、「中国留学生友の会」の代表世話人として、故大平総理夫人、茅誠司夫人等とともに民間人として、中国からの留学生との交流を深めるために長年力を注いでおられます。

新年会、工場見学、日本と中国の牡丹を見る会、夏合宿、運動会、最高裁・皇居・国会見学、音楽会、観劇会、ホームステイetc、留学生とともに楽しいひと時を過ごすために今年も多彩な行事が企画されました。

日中間人会議に、永井道雄元文部大臣等とともに教育・文化分科会の日本側委員として出席された小川氏は「帰国後は中国近代化の中心となつて働く留学生達は、日中の掛け橋となる人々である。日本での勉強のよき成果と、よき思い出をもち帰

ってもらうよう努力していかねばならないことを会議に出席して改めて痛感した。」とその報告書の中で述べておられます。勉強だけでなく友情の交流を深めるために、中国に関心をお持ちの方、ぜひ友の会にご参加くださるようご案内申しあげます。

年会費 一口 三六〇〇円

〒107 東京都港区赤坂四の三の三〇

横川ビル

社日中協会気付

中国留学生友の会

電話 〇三(五八三)六八八八代

## 編集後記



十月初めに編集委員が決まり、会報発行もいよいよ具体的な方向へと歩み出しました。支部委員五名と前支部委員二名、計七名が十月から三ヶ月間、何回か会合を重ね、試行錯誤の末、創刊号発行の運びとなりました。原稿をお寄せ下さった方々に御礼を申し上げますと共に、紙面の点で割愛せざるを得なかった原稿もありましたことをお詫びいたします。また、タナカ印刷の皆様に大変お世話になりました。感謝いたします。

編集委員一同